

街中に残された哺乳類の貴重なすみか—河川敷—

すずき さとし
鈴木 聡(学芸員)

はじめに

野生哺乳類の多くは夜行性で森林にすんでいます。最近では、タヌキやハクビシンが都市部に進出し頻繁に目撃されていますが、多くの哺乳類は餌となる動植物や隠れ場所のあるまとまった面積の緑地を必要とします。小田原の市街地を石垣山や曾我丘陵などの高い場所から眺めると、平地の大部分は道路や建物で覆われて灰色に見えますが、その中に緑色の帯状に見える河川敷が数本あります(図1:地球観測衛星Terra ASTER / VNIRの画像。緑地を判読しやすくするための画像処理により、河川敷は赤っぽく見える)。そこには、植物や昆虫を餌とするネズミなどの小型哺乳類やそれらを捕食する中型哺乳類が生息しているはずですが、小田原よりも都市化の進んだ地域でも、大河川(多摩川や利根川など)の両岸には緑地が広がっていることが多く、河川敷は意外と身近な哺乳類の生息場所になっています。

哺乳類の調査

どこにどんな哺乳類が生息しているかという情報は、哺乳類の生態を理解

し保護管理する上で最も基本的なものです。ところが、人の生活圏と隣接した河川敷にどんな哺乳類が生息しているのかは意外と知られていません。神奈川県では、相模川の下流などごく限られた地域でしか調査が行われておらず(文末参考文献参照)、全県的に調査が必要な状況です。そこで今回は、小田原市内を流れる三つの河川で哺乳類の生息調査を行いました。

人前に姿を現すことが少ない哺乳類の生息を確認するための最も簡単な方法は、痕跡探し(フィールドサイン調査)です。食痕や糞、足跡などの痕跡は生息の重要な証拠となります。最近では、自動撮影カメラもよく使われます。顔の模様や体型などが分かるように撮れれば、決定的な証拠写真になります。そのほかに捕獲という方法があります。ネズミの仲間など小型哺乳類には、写真や足跡による同定が難しいものが多いです。捕獲して体長、尾長などを計測することではじめて種同定が可能なこともあるため、捕獲は必要不可欠です。なお、哺乳類の捕獲は「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」(通称:鳥獣保

護管理法)により規制されているので、県や市町村の許可を得て行う必要があります。

2016年11月から12月にかけて早川にかかる太閤橋の周辺で自動撮影カメラを使った調査を行い、2017年1月から3月にかけて早川、狩川、酒匂川の河川敷で捕獲調査を行いました。同時にフィールドサイン調査も行いました。

調査から分かったこと

早川に設置した自動撮影カメラにはタヌキ、ハクビシン、ニホンイタチ、イノシシが写っており、特にハクビシンが多く撮影されていました(図2)。捕獲調査では、早川でタヌキ、ニホンイタチ、ノネコ、狩川でハクビシン、ニホンイタチ、ノネコ、アカネズミ、ドブネズミ、酒匂川でアカネズミを確認しました。フィールドサイン調査では、タヌキ、ニホンイタチ、ハクビシンの糞、アズマモグラの掘った穴、タヌキとニホンイタチの足跡を確認しました(図3)。狩川の河川敷で見つけたタヌキの糞はなんと15 cmもの高さに積もっていました(図4)。

タヌキには同じ場所に繰り返し糞(ため糞)をする習性があります。それが高く積もると目立つので見つけやすくなります。そのほか、夕方コウモリが飛んでいるのを目撃しました。ほとんどは人家周辺に多いアブラコウモリだと考えられます。

今回、小田原市内の3河川で生息を確認できた哺乳類は9種で、このうち外来種はノネコ、ハクビシン、ドブネズミの3種でした。このほか、ニホンジネズミ、ヒミズ、ヒメネズミ、カヤネズミ、ハタネズミ、ニホンアナグマ、キツネ、外来種のアライグマなど20種近くの哺乳類が河川敷に生息している可能性があります。

河川敷にすむ野生哺乳類を保全するために

河川敷は人の生活圏に近いにも関わらず植生が豊かなため、昔から哺乳

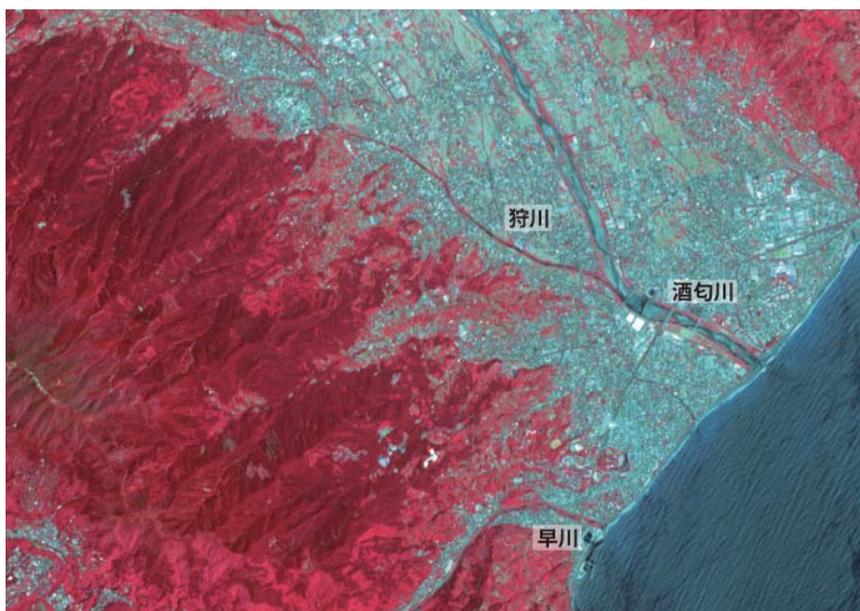


図1 小田原周辺の衛星画像。Terra ASTER / VNIR, 2015年5月1日観測(KPM-NT 1800)。植物を判読しやすくするために、植物に覆われているところを赤系統、海や河川を紺色、市街地を青灰色、田畑を青竹色に処理してある。

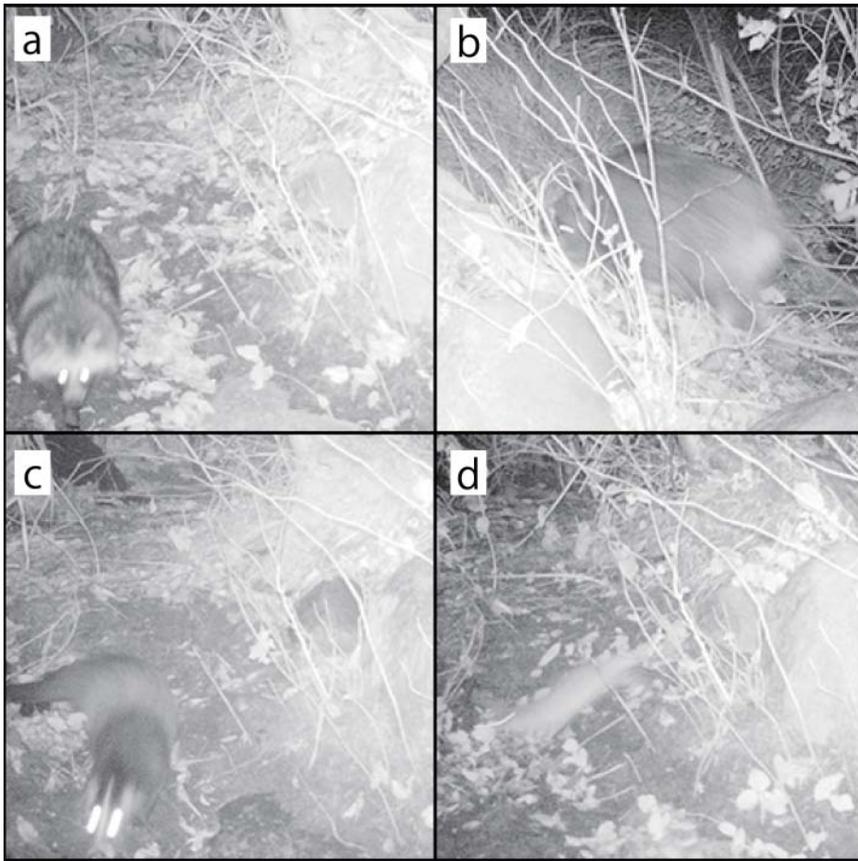


図2 自動撮影カメラで撮影された哺乳類
(a: タヌキ, b: イノシシ, c: ハクビシン, d: ニホンイタチ).

類の重要な生息場所であったと考えられます。しかし現在、市街地を流れる川幅が20 mほどの小さな河川は、両岸が垂直に近い角度でコンクリート護岸され、哺乳類だけでなく様々な生物の生息が困難な場所になってしまっています。

今回調査を行った川幅の比較的広い河川もコンクリート護岸されていますが、高水敷（堤防と川の水が流れている部分の間）にはヨシなどの植物が繁茂しているところもあり、生物多様性が高くなっています。堤防や護岸などによる治水対策は防災上必要ですが、

それと同時に水辺の生物多様性を保全することも重要です。治水と生物多様性保全はときに相反します。例えば、キツネやニホンアナグマは堤防上に巣穴を掘り、堤防を脆弱化させる可能性があるために厄介者扱いされていますが、河川生態系の上位捕食者として多様性の一翼を担っています。これらの動物を一方向的に排除するのではなく、共存する方法を考える必要があるのではないのでしょうか。

また、外来種の増加も大きな問題となっています。アライグマやハクビシンは、農業や家屋に被害をもたらすだけでなく、生態系にも深刻な影響を与えています。在来種を捕食することの影響のほか、生態的地位に近いタヌキやニホンアナグマと競争し生活場所を奪うことが懸念されています。

このように河川敷の環境は変化し続けています。それに伴って哺乳類の分布や個体数がどのように変わっていくのかを把握することは河川敷の生物多様性を保全するために必要不可欠です。そのために、調査を長期的かつ継続的に行っていく必要があります。

参考文献

青木雄司, 柳川美保子. 茅ヶ崎市における地上棲小型哺乳類の生息状況. 神奈川自然資料 28: 67-70, 2017.

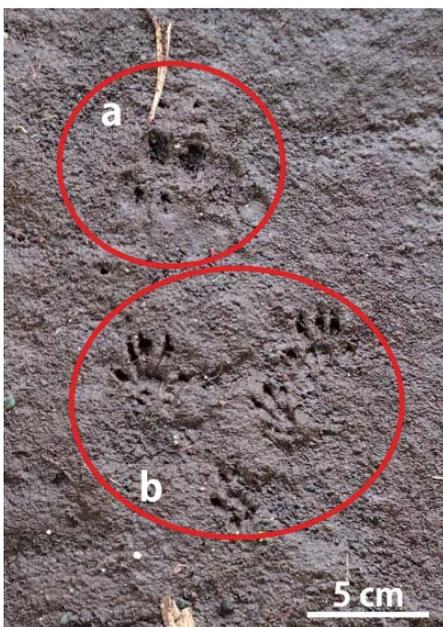


図3 泥の上に付いた足跡 (a: タヌキ, b: ニホンイタチ).



図4 タヌキのため糞.